第六章　魔槍

かりんは、机のかげに隠れるようにしてしゃがみ込み、つとめて感情を抑えながら、この夏、自分が何を見、何を聞いたのかを手短に話していた。

かりんのまわりには、千鶴と相原、そして意識を取り戻した川島がいて、彼女の話に耳を傾けている。

一方、日向と南方は、すぐそばでかりんの話を聴きつつも、なにやら忙しそうに手を動かしている。ガスバーナーが、音をたてて派手な炎を上げているところを見ると、はやくも、銀の弾丸づくりに取りかかっているらしかった。

「そのとき警官が目にしたのは、あくまでも〝狼のような姿をした野犬〟でしかなかったから、わたしや詩織ちゃんが、いくら人狼のしわざだって言ってもぜんぜん信じてくれなくって……」

「警察って、そういうところよね。頭のカタイ連中ばっかり！」

千鶴が憤慨したように言う。

「……じゃあ、それがわかってたから、横井先生、琴宮さんを襲うのやめたのかしら？」

「たぶん、ね」

相原の言葉に、千鶴が短く答える。

かりんは少し間をおき、頭の中を整理してから話を再開した。

「そのあと、詩織ちゃんから変身まえの横井の容姿を聞いて、すぐにピンときたの。あ、あいつだってね。でも、決定的な証拠がなかったから、それを確かめようと思って……」

「うんうん」

と、千鶴と相原が、ふたりそろって相槌を打つ。

「満月とか、狼とか、とにかく、横井に関係のありそうなことすべてをキーワードに、学校のデーターベースにアクセスして調べてみたの……。あいつの出身大学が、お兄ちゃんとおなじだったって事実はすぐにわかったわ。でも、わかったのは……」

「それだけじゃなかった！」
得意そうに人差し指を立ててそう言ったのは、かりんではなく千鶴だった。
話の腰を折られ、目をぱちぱちさせているかりんを横目に見ながら、千鶴が人差し指を立てたまま、先を続ける。
「満月の日にかぎって、越高で飼ってるウサギやニワトリが、いなくなるという不可解な事件がある。横井が転任してくるまえは、そんな事件、起きたことなかったのに……。そうでしょ？」
「ちいちゃん、どうしてそのことを？」
不思議そうな顔でかりんが訊く。
「うん、あたしの友だちで、ゆりって娘がいるんだけど、その娘もそのことに気がついていたみたいなの。ま、横井が転任してくるまえは、っていう部分は、あくまでもあたしの推測だけど……。それで、きょうは満月だから、様子を見てきてくれないかって、頼まれちゃったってわけ。ほんと、ついてないわよね……」
「う、うん」
なんと言っていいかわからず、かりんは、ただ小さくうなずいた。
「なんか、不幸の宝くじに当たったっていう表現がぴったりってかんじ。それも、あたしが引き当てたのは、まちがいなく一等賞だわ。うるうる」
両手を口もとに持ってきて、うるうるポーズをしている千鶴に対し、相原はつかのま教師としての顔をとりもどし、言った。
「でも、紺野さん？　宝くじは、引き換えに行かなければ、ただの紙屑でしかないってこと、忘れちゃだめ。みんなで力をあわせて立ち向かえば、きっとなんとかなるわよ！」
「そうよね、きっと、なんとかなるわよね。でも『宝くじは、引き換えに行かなければ……』なぁんて、さっすが先生、いいこと言う言う！」
千鶴が肘で相原をつつく。
「あは、美香だって、たまには、ね……」
と、相原が照れたように言ったとき、それまで黙って話を聞いているだけだった川島が、唐突に口をひらき、質問してきた。
「ところで、紺野君はまだなんでしょうか？　肝心の銃がないと、銀の弾丸ができても意味がないですし……」

「そういえば、浩一のやつ遅いわね。なにやってんのかしら？　って、まさか……」

「！」

かりんが弾かれたように立ち上がる。

「わ、わたし、ちょっと行って見てくる」

「まって、あたしもいっしょに行くわ！」

ほとんど間をおかずに千鶴も立ち上がった。しかし、かりんは千鶴を制して、言った。

「ちいちゃんはここにいて！　もしもってこともあるし、二人より一人のほうが目立たないような気もするし……ね？」

「でも……」

「だいじょうぶ。わたし、こう見えても足には自信があるんだから！　いざとなったら、あいつを撒いて逃げてくるわ！」

千鶴が、大きくため息をつく。

「わかったわ。気をつけてね……」

千鶴の言葉に黙ってうなずき、かりんは急ぎドアへと向かった。

そのとき。南方があわててかりんを呼び止めた。

「あ、まってください、琴宮さん。これ、持っていってください。もしものときは、きっと役に立つと思うから……」

「え？」

かりんは、駆けよってきた南方から携帯電話くらいの大きさの黒っぽい器具を手渡され、怪訝そうな面もちで尋ねた。

「南方さん、これって……」

南方は丸眼鏡をはずしてにっこりと微笑み、かりんの疑問に答えはじめた。

かりんは、校舎から出たところで思わず立ち止まった。

自身の心臓が拍動する音をはっきりと聞いたような気がした。

瞬間、浩一と兄史郎の最期の姿がオーバーラップする。

かりんはほとんど悲鳴に近い声で浩一の名を呼び、駆けだした。

浩一は、正門へとつづく石畳の上に、生死不明で横たわっている。

「浩ちゃん！　しっかりして、浩ちゃん！」
腕を広げ、仰向けに横たわったまま、ぴくりとも動かない浩一の傍らにひざまずき、かりんは祈るような思いでその名を呼び、身体をゆすった。
「浩ちゃん、おねがい……。目を、目をあけて……」
ぎゅっとまぶたをとじ、浩一の胸に顔をうずめてつぶやく。
アルミニウム製の銀ボタンが、頬につめたかった。
浩ちゃん……。
まさか、死んじゃったなんてこと、ないよね？
おねがい、目をあけて、返事をしてよ……。
トクン。
え？
トクン、トクン、トクン……。
これ、心臓の音？
かりんは、まぎれもない浩一の胸の鼓動を耳にし、はっとして顔を上げた。
生きてる！
「浩ちゃん、しっかりして！」
「っ……」
かりんの呼びかけに反応したのか、わずかにまぶたが動き、呼気がもれた。
「浩ちゃん！」
かりんはふたたび浩一の名を呼び、その顔をのぞき込むようにして意識の回復を待った。
ややあって。
「ううっ、ごほっ……ごほっ、ごほっ」
浩一は、苦しそうにせき込んでから、ようやく目をあけ、肘をついて上半身を起こした。
「う、かりん？」
どうして、かりんがここに？
そんな不思議そうな表情で、浩一はかりんの顔を見つめている。
深い眠りから覚めたばかりといった感じで、まだ多少、記憶に混乱があるようだったが、かりんはかまわず、力いっぱい浩一を抱きしめた。

「浩ちゃん、よかった。わたし、わたし……ほんとに、心配したん……だから……ね」

あふれてくる涙をこらえることができず、ぎゅっと目をつむるかりん。

浩一は、そんなかりんの背中にそっと手をまわし、かすれるほど小さな声で囁いた。

「ごめん……」

かりんは腕の力をゆるめ、浩一からそっとからだを離した。そして、くちもとに微笑を浮かべたまま、浩一の瞳をやさしく見つめる。

「謝ることなんてない。でも、何が……」

しかし、かりんはことば途中でくちびるを凍りつかせ、視線を浩一からその背後へと移した。ほんの一瞬だったが、何か黒い影のようなものが動いた。――そんな気がしたのだ。

かりんの緊張を感じ取った浩一は、彼女の視線の先を追って訊く。

「どこだ？」

「いちょうの木」

浩一の問いに、かりんが短く答える。

その銀杏は、校内一の古株で、大きさも他を圧倒している。

今、かりんたちがいる位置からは校舎に向かって左手、距離にして二十メートルほどのところにそれは存在していて、自らが散らした黄金色の落ち葉の中に、静かに佇んでいた。

浩一は、かりんの言った銀杏の古木があるあたりに目を向けた。

と、いきなり声がした。

「かかったのは、雌兎が一匹か……。兎は確か、あと二匹いたはずだが、さて、何処に隠れている？」

横井は樹幹から音もなく現れ、腕を組んでその大木に寄りかかった。

かりんは、横井から視線をそらさずに、小声で浩一にたずねた。

「浩ちゃん、走れる？」

「ああ」

次の瞬間。ふたりは、ほとんど同時に立ち上がると、校舎をめざし、全力で駆けだした。

すくなくともその瞬間は、横井が動いたような気配はなかった。浩一もかりんも、これなら逃げきれる。そう思った。が、正面玄関の小階段が目前まで迫ってきたときだった。いきなり前方の空間が奇妙にゆらいだような気がして、ふたりはあわてて立ち止まった。

浩一が、確認のために手をのばす。

「くそっ！」

案にたがわず、そこにはふたたび不可視の結界が出現していた。

「なかなか、いい勘をしている」

横井の声は、すぐ後ろから聞こえてきた。

きっ、とした顔つきで、かりんがふり返る。浩一も、わずかに遅れてそれにつづく。

口許に薄く笑みを浮かべ、横井が言う。

「そう簡単に逃がしてしまっては、罠を仕掛けた意味がないからな」

浩一が背中にかりんを庇おうと、一歩前にでる。一瞬、横井から見て、かりんが浩一の陰に隠れ、死角となる。それが明暗を分けた。

横井が背をかがめ、低い姿勢のまま一気に距離をつめた。

「だめ！」

捨て身の覚悟で突っ込んでいこうとした浩一を、かりんが腕をとって止めた。

その瞬間。

放電による青い火花が散った。

その一瞬に何が起きたのか、浩一にはまるでわからなかった。

横合いからかりんの腕がのび、つぎに何かがはぜるような音がした。そう思ったら、横井がガクッと膝を落として目の前にうずくまっていたのだ。

しかし、かりんの攻撃は、それで終わったわけではなかった。横井の背後にまわりこみ、首、というより延髄にスタンガンを押しあて、つづけざまに、二〇万ボルトもの高圧電流を見舞う。

パルスが連続して発生し、紫電が跳ねた。

横井は為すすべもなく、かりんの攻撃を受けつづけている。どうやら、まったく躯が動かないようだ。

唖然としてその様子を見ていた浩一に、かりんが早口で叫んだ。

「浩ちゃん、障壁がまだあるかどうか、確かめて！」

南方から借り受けたスタンガンのおかげで、からくも危機を脱したふたりは、不可視の結界が消えていたのをさいわいに、急ぎ校舎に駆け込んだ。横井がどのくらいでダメージから回復するのか、見当もつかなかったからだ。

ふたりは校舎のほぼ中央、大階段付近まで来たところで、一瞬ためらい、階段を上へと向かった。

しかしその途中、一階と二階の間にある踊り場にさしかかったところで、突然浩一が立ち止まり、かりんを呼び止めた。

「かりん、まってくれ。おれ、まだ……」

かりんは、びっくりしたように浩一をふり返り、叫んだ。

「いいから、今は黙って走って！」

「しかし、あれがないとやつを倒せない」

「あれって？」

かりんはそう言いながら、浩一の胸のあたりに手をのばし、そこにコルトがあることを確認する。今さっき浩一を抱きしめたとき、それの存在に気づいていたのだ。

「ちゃんとあるじゃない！」

「ちがう、薬莢だ」

横井に聞かれないよう、声を落とし、浩一が言う。

「薬莢？　それなら必要ないと思うけど」

「なに？」

「わたし、予備の銃弾を持ってたから」

「な、それならそうと、はやく言え！」

「そんなことといったって、浩ちゃん、なんにも言わなかったじゃない！」

「う……」

かりんは、浩一にそれ以上の反論をゆるさず、腕をとって駆けだした。

「ほら、はやく！」

「ああ……」

ふたりは、ふたたび階段を駆け上がりはじめる。

しかし、先行しているかりんが、二階から三階へとつづく階段にさしかかったとき。怒気を含んだ獣の咆哮が、校舎内の空気を震わせ、とどろき渡った。

「ちっ、もう復活しやがった」

と、あきれたような口調で浩一が言う。

「浩ちゃん、どうしよう……」

「ああ、このまま化学室に直行するのはまずいな……」

しかし、考えているひまはなかった。すぐに、階段を駆け上がってくる横井の足音が、階下から響いてきたからだ。

「くそっ！」

ふたりは追われるままに階段を駆け上がっていき、四階まで来たところで進路を転じた。

なるべく、千鶴たちのいる場所から遠ざかるよう、化学室のあるB棟とは逆のA棟を西の方角に向かう。

ぶきみなほど静まり返った廊下を駆けながら、浩一はチラッと後ろをふり返った。

横井との距離は、教室ふたつ分ほど。いま走っている廊下の突きあたりは美術室だが、事実上、行き止まりといえる。

ふたりのとれる行動は、美術室の手前にある階段を上、あるいは下に向かって移動することのどちらかしかなかったはずだ。しかし、ふたりとも追われていることで冷静な判断力を失っていたのか、そのまま直進してしまう。

美術室のドアを開けて中に入ると、かりんは急いで鍵をかけた。扉に鍵が掛かっていなかったのは、運がよかったとしか言いようがない。

とりあえず逃げ込んだのはいいが、行き場を失い、追い詰められてしまったのも事実である。浩一はかりんをふり返り、ついで、その後ろの重厚そうなドアに目をやった。

その直後、がちゃがちゃと乱暴にノブをまわす音がし、耳障りなほど低くて陰湿な人狼横井の声が、ドアの外から響いてきた。

「そろそろゲームオーバーだ」

そして。

ドォーン！

派手な音がした。おそらく、横井が体当たりをしかけたのだろう。幸運なことにドアが壊れて開いたりするようなことはなかったが、ぐずぐずしてはいられない。

浩一は、何か武器になりそうな物はないかと、がらんとした教室の中を見まわしてみた。

教壇の反対側、蛇口のならんだ流しの前に、折り畳み式の長机と椅子が重ねて積んであり、イーゼルがその脇に折り重なるように立てかけてあるほか、デッサン用の石膏像が、窓際の台の上に数体置いてあるくらいだ。残念ながら、どれもあまり役に立ちそうにない。

二回目の衝撃音。

ビリビリとドアが振動する。扉の開閉する方向とは逆側の向きから力が加わっているので、辛うじてもっているといった感じだ。

かりんは小走りに教室を横切り、窓際へと向かった。

窓を開け、頭のベレーを押さえつつ、そこから身を乗りだして下のほうに目をやる。

カーテンを結びあわせ、ロープがわりにして下まで降りられないかと考えたのだ。しかし、地上まではかなりの距離がある。壁面に足場となるような庇でもついていればまだしも、この状況ではかなり無理のあるアイディアだった。

三回目の衝撃音。

ドアが、ミシッ、というぶきみな音をたて、その横の壁に亀裂が生じた。

「くそっ！」

浩一はもう一度、なにか策がないかと必死になって考えをめぐらせた。そして、教室の中をあらためて見まわし、それに気がついた。

浩一の目にとまったのは、床磨き用の大型電動クリーナーだった。

「かりん、準備室から、彫刻刀を見つけだしてきてくれ！」

「う、うん」

浩一が何か思いついたらしい。――そう悟ったかりんは、即、行動に移った。

四回目の衝撃音。

ドアがいまにも弾け飛びそうなほど反り返り、天井からは、パラパラとコンクリートのかけらが降ってくる。

完全に時間との戦いとなった。
浩一は流しへと急ぎ、そこに転がっていたかなり大きめの筆洗ふたつに水を張り、取って返した。そして、中身をドアの近くの床にまき散らす。
「浩ちゃん、あったわ！」
浩一が、ちょうど水を撒きおわったところに、かりんが手に彫刻刀を持って現れた。
浩一は黙ってうなずくと、かりんが手にしている数本の彫刻刀の中から、切りだし刀のように、斜めに刃のついたものを選びだした。
その間にも、横井の体当たりは執拗にくり返されている。
浩一は、クリーナーのコードを本体に近い部分で切り取り、絶縁のために施されているビニールのコートを、数センチほど削って鋼線を剥きだしにした。
さすがにここまでくれば、かりんにも浩一のしようとしていることが理解できた。浩一は、水たまりとなった床の上に剥きだしにしたコードの端をひたし、プラグの部分をかりんに手渡した。そして、そっと耳打ちする。
「タイミングが命だ。たのんだぞ！」
かりんは黙ってうなずき、コンセントのある壁ぎわへと走った。
ドォーン！
十三回目の衝撃音と共に扉はあえなく崩壊し、人狼横井が教室内に飛び込んできた。
水浸しになった床の上に横井の足が降りたその瞬間、かりんがコンセントにプラグを差し込んだ。
じゅっ、という音をたてて水蒸気が上がった。
コードが跳ね、膨大な量の電流が奔流となって横井の躯を駆けめぐった。
すぐにブレーカーが降り、スパークは止まったが、その直後、今度は浩一の振りまわす折り畳み式の長机が、横井を襲った。
ごがっ！
合板のへりの部分が、躯が痺れて動きの止まった横井の側頭部に炸裂する。
机の自重と遠心力を最大限に利用した、情け容赦のない攻撃だ。
軽量な横井は、ぼろくずのように宙を舞い、壁に叩きつけられた。浩一の仕掛けた罠は、単純ではあったが、それなりの効果があったといえるだろう。

ごがっ！
ふたたび鈍い音がした。
浩一が、二撃目を横井の後頭部に打ち下ろしたのだ。
床の上に這いつくばっていた横井は、机と床の挟み撃ちにあい、衝撃のエネルギーを他に逃がすことができなかったはずだ。
普通の人間なら、即死していたとしても、おかしくはないほどの打撃だった。
しかし、浩一が、さらに攻撃を加えようと躰をひねり、一瞬横井に対して背中を見せたそのとき、人狼の右手がぴくりと動いた。
そして、次の瞬間。
浩一が、渾身の力を込めて振り下ろした机を、横井はいともあっさりと受けとめていた。
「くっ！」
ぞくっ、と、浩一の背筋を冷たいものが走りぬける。
横井は無言だった。だが、その双眸は、地獄の獄卒でさえ思わず逃げだしたくなるほどの凶悪な黒い光に満ちていた。
満月期にある人狼は、ふつう物理的な打撃系の攻撃に対しては、異常なまでに高い耐性を示すとされている。
浩一とて、そのことは知っていたし、忘れていたわけではなかった。しかし、まったく抵抗することができない今なら、あるいは……。そう思ったのも、また事実ではあった。
「浩ちゃん、離れて！」
いつのまにか、教室の後方へと移動していたかりんから声がとんだ。
浩一はかりんの指示どおり、反射的に長机を放し、さっと後ろに飛び退さる。
かりんはそれを確認すると同時に、壁の右側やや高い位置に備えつけられていたブレーカーに手をのばし、押し上げた。
バリバリバリッと音をたてて紫電が暴れまわり、横井の動きを止める。
もちろん、すぐにブレーカーは作動したが、かりんはとどめとばかりに、もう一度それを押し上げた。結果、横井はふたたび沈黙した。
「かりん！」
浩一の呼びかけに、かりんがウインクで応える。

呼吸のあった連係プレーで、なんとか危機を脱したふたりは、事故防止のために、コンセントからプラグを引き抜く。――という余裕さえみせ、美術室を後にした。

横井が意識を取り戻したとき、すでにふたりの姿は、美術室から完全に消えたあとだった。束の間ではあるが、自分が失神状態に追い込まれていたことを悟った横井は、唇の端を吊り上げ、低い声で呟いた。

「楽に死ねると思うなよ……」

化学室の中は、一瞬にして緊張感に満たされた。そこにいた全員が、狂える獣と化した横井の咆哮を耳にしたからだ。

「あ、あの、あの声は……」

震える声で、南方が誰にともなくたずねた。それを受けて答えたのは千鶴である。

「決まってるじゃない、横井よ！」

相原が落ちつかなげに腰を浮かせ、千鶴をふり返って言う。

「紺野さん、どうしよう……」

「どうしようって言われても……」

このまま、かりんを信じてここで待つか、それとも、危険な目にあうのを覚悟で確かめに行くか――。

二者択一をせまられ、千鶴は返答に窮した。

「ミイラとりがミイラにって言葉もありますし、ここは少し、様子を見たほうがよくはないですか？　もしかしたら、誘い出すための罠ってことも考えられますし……」

万が一に備え少しでも身を隠そうとしてか、しゃがみ込んだ姿勢のまま、川島が口を挟んだ。

「でも……」

千鶴は言葉につまり、視線を落とした。

教室中に、重苦しい沈黙が広がっていく。

理性と感情のせめぎあい。

ながれ去る時間。

千鶴が考えに考えたすえ、相反するふたつの命題に結論をだしたちょうどそのとき。鈍い衝撃音が響いてきた。

「先生、あとを頼みます！」

「あ、紺野さん、まって……」

相原の制止をふりきるようにして、千鶴は教室を飛びだしていった。

空はまだ、深みのある青をたたえていたが、陽は確実に、西に傾きつつあった。

浩一とかりんのふたりは今、屋上にいた。もう少し正確にいえば、A棟西の屋上にある階段室――塔屋のさらに上ということになるだろうか。学校によっては、この上に給水塔、あるいは給水タンクなどが備えつけられている場合もあるが、かりんたちの通う戸越高校では、給水タンクは校舎中央の塔屋内に据え付けられているので、とくに何もない。強いていえば、避雷針が立っているくらいだが、その避雷針さえ、いまは根元から折れて床の上に転がっている。おおかた、生徒のうちの誰かが、いたずらでもして折ってしまったのだろう。

ふたりが横井の追跡をかわすため、壁面に直に取り付けられた梯子をのぼって、そこに身を伏せてから、すでにかなりの時間が経過していた。

しかし、どういうわけか、横井はいっこうに姿を現そうとしない。

すぐにでも追ってくるはず。そう思っていたかりんは、その理由をあれこれと考えずにはいられなかった。

もしかしたら、あのまま死んじゃったのかも……。

――これは、願望を込めた希望的観測。

もしかしたら、わたしたちが屋上にいるのがわかっていて、どこかで待ち伏せしてるとか……。

――これは、かなり現実味のある推測。

もしかしたら、あいつが美術室のドアに体当たりしたときの音を不審に思って、ちいちゃんたちが確かめに来て、それで……。

――これは、いちばんあってほしくない心をかき乱すような憶測。

ダメッ！

これ以上こんなところで、じっとなんかしてられない！

かりんがそう思ったのとほぼ同時だった。ふいに、浩一が立ち上がり、言った。

「こんな所にいつまでもこそこそと隠れていたってしょうがない。かりん、行くぞ！」
「うん！」
かりんは、胸中に巣くいはじめていた闇色の霧を振り払うように、元気よくうなずいた。そして、ベレーを押さえながら、浩一のさしだした手をとって立ち上がった。
しかし、まさにそのとき、ふたりの背後で、いちばん聞きたくなかった男の声がした。
「不意打ちというのは、あまり性に合わなくてね……」
「！」
「くっ、いつのまに……」
ふり返って、浩一が言う。その瞳に映ったのは、まぎれもなく、人狼横井であった。
「くっくっくっくっ、気づかれないように近づくのは、けっこう骨が折れたよ。だが、それなりの甲斐はあった」
浩一、そしてかりんも、動揺の色を隠せなかった。この場所で横井とやりあうことなど、まるで考えていなかったからだ。
横井は笑っていた。サディスティックな笑いである。追いつめた獲物をどう料理しようかと考えているであろうことは、その獣面からも容易に読みとれた。
「さて、リクエストにお応えしよう。どんな死に方が好みかね？」
「そうだな……」
浩一は、相手の出方を慎重に探りながら、さりげなくかりんを後ろにかばって、一歩前にでた。
「季節は春。満開のさくらのもと、愛する妻や子供、孫たちにかこまれながら、散りゆく花びらをながめつつ、静かに逝きたい」
「却下だ」
「ちっ、心の狭いやつだな、リクエストに応えるって言うから、希望を述べたんだろうが……って、ちょっと待てよ！」
横井がゆっくりと、まわり込むような感じで近づいてくる。ふたりは、その動きにあわせ、じりじりと後退せざるをえない。

「屋上から、二人そろって飛び降り、心中か……。あまり面白くもない幕切れだが、致し方あるまい」

屋上室の上はさして広いというわけではない。ふたりはいつのまにか北側の断崖へと追い込まれていた。むろん、手摺りなどもなく、そこから落ちれば、地上までなんの障害物もないので、まず命はないだろう。

「くっ……」

浩一は歯がみしたが、いまさらどうしようもなかった。

「浩ちゃん、来るわ！」

「ああ、わかってる！」

言いながら、浩一はわずかに腰を落として身構えた。それを見て、横井が犬歯を剥きだして笑い、動いた。

ほとんど玄関前でやり合ったときの再現になった。これ以上は後ろへ下がれないふたりに対し、無造作に距離を詰めてくる横井。

だが、かりんはあわてず、さっきと同じように浩一のかげに隠れたまま、さっとスカートのポケットから手をだした。

「ふん、またそれか、そうそう何度も同じ手を喰うほど馬鹿ではないつもりだ」

横井は、浩一のかげから伸びてくるかりんの手に気がつき、それなりの間合いをとって立ち止まった。

が。

「こっちだって、そうそう何度もおなじ手は使わないわよ！」

言うがはやいか、かりんは手にしていたハンディガンタイプの催涙スプレーを横井の顔面に向かって吹きかけた。

「ぬ!?　ぐあぁぁっ！」

横井は両手で目を押さえ、絶叫した。

なまじ、見えていたことが、かえって横井にとっては災厄となった。

かりんの手の中の物が、どうやらスタンガンではないということが判った時点で、横井はそれがなんなのか、見極めようと目を凝らした。しかし、かりんにとっては、それがまたとない好機となったのだ。

視覚をやられた横井は、その場で動きを止めた。へたに動けば、地上へと落ちることになるからだ。

ふたりは、静止している人狼横井のわきをすばやくすり抜け、そのまま屋上側の縁まで走った。このとき、かりんはとりあえず、この場から逃げることだけを考えていたのだが、浩一は違った。

かりんが屋上室の縁に手をかけ、うしろ向きにぶら下がって、飛び降りようとしていたとき、浩一は、すぐそばの床の上に転がっていた避雷針を拾い上げたところだった。

その避雷針は、浩一がふだん部活で使っている竹刀とくらべれば、かなり長めではあるものの、重さのほうは手頃だった。

やや間合いは遠いが、これは浩一の形といえただろう。

構えを中段に取り、二、三歩助走をつけて思いきり地を蹴り、大きく踏み込む。と、同時に、ばねをきかせ、左手一本での片手突きにいった。ねらいは、後ろを向いたまま動きを止めている横井の首筋である。

しかし、横井は聴覚だけに意識を集中させ、浩一の動きを読んでいたらしい。その瞬間、みごとに反応してみせた。

「ちっ、外したか……」

浩一の放った突きは、人狼の首の皮を幾分削ぎ取りはしたものの、致命傷にはほど遠い攻撃に終わった。そのうえ、浩一にとって恰好の武器であった避雷針は、その切っ先をいつのまにか横井の右手によって押さえ込まれ、二の太刀を振るえない状況に追い込まれていた。

目を閉じたまま、やや後ろをふり向くような感じで、横井が言う。

「残念だったな」

「ふん、今度は決めてやるさ」

油断なく身構えながら、言葉を返す。

だが、人狼とまともに力くらべをして勝てるはずもなく、浩一はそれ以上の攻撃を諦め、避雷針を放して飛びすさった。そして、すぐに身をひるがえし、屋上室の上から飛び降りると、かりんの後を追った。

かりんは、足を止めて浩一が追いつくのを待っていた。

「浩ちゃん、あんまり心配させないでよね！」

「わるい」

「もうっ、そればっかり……」

そのとき、中央の階段出口から、いきなり飛び出してきた影に気がつき、かりんは思わず立ち止まった。
「ちいちゃん！」
息をきらし、険しい面持ちで飛び出してきたのは、千鶴だった。
「よかった、ふたりとも無事で……」
千鶴の顔に、安堵の表情が浮かぶ。が、それもつかのまだった。
「え……？」
千鶴の注意が自分たちの後方に移ったことに気がつき、かりんはふり返った。
それとほぼ同時に、千鶴の声が飛んだ。
「浩一っ、後ろ！　よけてぇっ!!」
「なに!?」
浩一がふり返ったときにはすでに、横井の手から凶槍と化した避雷針が放たれたあとだった。
一瞬、状況を把握しきれず、凍りついたように動きが止まる。
避雷針は空を切り裂き、寸分の狂いもなく、浩一をめがけて飛来してくる。
しまった！
ようやく、何が起きつつあるのか理解した浩一の脳裏を、自責の念が言葉の矢となって駆け抜けた。
気づくのが遅すぎたとしか言いようがなかった。脳は回避行動をとるよう指令をだしているのだが、身体がついていかない。どんなに反射神経のすぐれた人間でも、タイムラグゼロで反応することはできないからだ。
しかしその瞬間、かりんが横から浩一をかばうようなかたちでからだを投げだしていた。
ベレー帽がながれ、漆黒の髪が広がっていく。そして……。
刹那の差だった。
避雷針は、かりんの上腕部を擦過し、千鶴のからだを掠めるようにして飛び去り、はるか彼方のリノリウムの床に突き刺さった。
折り重なるようにして床の上に倒れ込んだかりんと浩一のもとに、千鶴があわてて駆け寄ってくる。
「浩一、かりんちゃん、大丈夫？　怪我はない？」

千鶴の呼びかけに、まず、かりんが起き上がり、ついで浩一が身体を起こした。
「へいき、どこもなんともな……」
かりんは、顔にかかった髪を背中に流そうとしてふいに顔をしかめ、右腕を押さえた。
その一瞬後、彼女の袖口から流れでた鮮血が糸のように細いすじを描き、小指をつたって雫となった。
「かりん！」
「かりんちゃん、腕……」
「だ、だいじょうぶ。ちょこっとかすっただけ……」
かりんは、傷を負ったほうの腕をまげたりのばしたりしてみせた。
「ほら、ね？」
「かりん……」
「あ、お礼を言うんなら、ちいちゃんに言ってね。ちいちゃんが注意してくれなかったら、絶対に間にあわなかったもの。それより、今は……」
そう言ってかりんがふりむいたとき、屋上室の上にいた横井が、音もなくリノリウムの床の上に降り立ったところだった。
しかし、どういうつもりなのか、すぐに走って追ってくるような気配はない。それを見て、浩一がつぶやくように言った。
「どうやら、視力が回復したってわけじゃないらしいな……」
「え？」
言われてみれば、確かに横井は、その場でわずかに首を傾げ、聞き耳を立ててこちらの様子を探っているようにも見える。
「間違いない。奴は、おれたちの足音だけを頼りに、勘であれを投げたんだ」
「そんな、うそでしょ？」
信じられない、といった感じでかりんがつぶやく。
一方、浩一とかりんの話の流れから、催涙スプレーの使用ににより横井が視力を失っていることを的確に読みとった千鶴は、いつものように人差し指を立て、言った。
「ふーん、そうなんだ。じゃ、もしかして、今があいつを倒す絶好のチャンスかもね」

「ち、ちいちゃん、お願いだから、ばかなこと言わないで！　とにかく、今は逃げるのが先よ！」

言葉とともに、かりんは千鶴の手首を掴み、引っ張るようにして駆けだしていた。

浩一は、あわててかりんのベレー帽を拾い上げ、後につづきながらつぶやいた。

「おれ、もしかしたら騎士失格かも……」

三人が校舎に入ったところで、千鶴の後を追ってきた相原と合流することができたのは、大いなる僥倖といえたかも知れない。何故なら、相原はそれなりに役に立ちそうな得物を手にしていたからだ。

四人は、横井の追撃を気にしながらも手短に作戦を練った。結果、時間がないことも手伝って、かなり強引ともいえる千鶴の提案が、そのまま通ってしまうこととなった。

「わかったわ。じゃ、エレベーター前で待ってるから……。浩ちゃん、行こう」

「……」

かりんにうながされ、浩一はしぶしぶと階段を下りはじめた。

千鶴と相原のふたりは、階段を駆け下りていく浩一たちの足音を耳にしながら、互いに、こくんとうなずきあった。もう後戻りはできない。息を殺し、横井が屋上から校舎の中へと入ってくるのをじっと待つ。

ややあって、ノブがまわり、微かな軋み音をたてて扉が開いた。

相原の手にしているモップの柄が、緊張のためか、上下に細かくゆれる。

扉をくぐった横井は、その場でいったん立ち止まり、耳をすませた。

壁ぎわにぴったりと身体を寄せ、審判の時を待つ千鶴と相原。

もし、あいつの視力がすでに回復していたら……。

考えたくもないｉｆ。

負の思考の渦が、千鶴と相原、ふたりの頭の中をかきまわす。

しかし、人狼は何も気づかなかったのか、すぐに歩きはじめてくれた。

ふたりにとって幸いだったのは、横井が催涙スプレーにより、視覚だけではなく嗅覚をも麻痺させていた。――ということだろう。

危険な賭けだったが、どうやら運命の女神はふたりに微笑んでくれたようだ。

相原がタイミングを見はからって、横井の足もとにモップを投げつける。
微妙な空気の流れを感じ取り、横井がふり返る。
だが、人狼が気配を感じ取ったときにはすでに遅かった。
モップの柄に躓き、その躯がおよいだところに、千鶴が後ろからすかさずダッシュして蹴りをくわえる。
計算どおり、横井は見事に階段から転げ落ちてくれた。
しかし、千鶴と相原のふたりは、人狼横井に対して、この程度の攻撃をするために、わざわざ待ち伏せしていたわけではなかった。
踊り場でようやく躯を起こした横井に、とどめの一撃が待っていた。
ガシャン！
千鶴の投げつけた丸フラスコが、横井の顔面にあたって砕け散った。
「ぐ、ぐあああああああああああっ！」
一瞬後、中に入っていた液体を浴び、横井が絶叫した。
「横井センセ、濃硫酸の味はどう？」
階段の上から横井を見下ろし、勝ち誇ったように千鶴が言った。